

学校体育授業におけるターゲット型ゲーム（ゴルフ）導入の提案

—知的障害特別支援学校での体育授業実践から（3）—

Proposal of the Introduction of the Golf Game in the Lesson of the Physical Education.

— Proposals based on the Physical Education Classes of a Special Needs Schools for Intellectual Disabilities (No.3)—

高橋 憲司 Kenji Takahashi

（現代マネジメント学部）

清野 宏樹 Hiroki Seino

（北海道釧路養護学校）

抄 録

筆者らは、文部科学省（2013）の「体育・スポーツに関する世論調査」、およびスポーツ庁スポーツ課（2017）の「スポーツ実施状況等に関する世論調査」をもとに、運動実施率の高い運動と体育授業との関連を考察し、高校卒業以降の運動習慣形成のためには、体育授業にて個人で取り組める「ウォーキング」「ランニング」「体操」といった運動に重点を置くことや、「的あて遊び」「ゴルフ」「ボウリング」等のターゲット型ゲームの導入が必要と考えた。これまでに通常学校において「全身持久力向上を目的とした体育授業の工夫」や「的あて遊び」の導入についての提案を行った。本稿では、通常学校の学習指導要領に配置されていない「ゴルフ」（スポーツ科には配置あり）を、知的障害特別支援学校の生徒を対象に体育授業内で実施し、ゴルフ授業が「単元のねらい」に沿って実践できるかを検証した。結果として、生徒の誰もがゴルフに嫌悪感を抱くことなく取り組むことができ「単元のねらい」を達成することができた。今回の実践結果を踏まえ、小・中・高の学習指導要領の「球技」の中に「ゴルフ」も含めたターゲット型ゲームが新たに設置されることを期待したい。

キーワード

スナッグゴルフ	snag golf
運動実施率	exercise implementation rate
学習指導要領	the government course guideline

目 次

- 1 はじめに
 - 2 方 法
 - 3 結 果
 - 4 考 察
 - 5 付 記
- 謝 辞

1 はじめに

文部科学省 (2013) が 20 歳以上の男女を対象に調査を行った「体力・スポーツに関する世論調査 (平成 25 年 1 月調査)」では、1 年間の内、運動やスポーツを行った人は 80% 強であり、調査対象者全体の運動実施率 (複数回答) は、1 位が「ウォーキング (50.8%)」、次いで「体操 (30.8%)」、「ボウリング (12.7%)」、「ランニング・ジョギング (12.7%)」、「水泳 (9.4%)」、「ゴルフ 9.3%」となっている。一方、同調査によるチームスポーツの実施率については「野球・ソフトボール (5.3%)」、「バレーボール・バスケットボール等 (5.2%)」、「サッカー・フットサル (4.9%)」であり。個人で取り組めるスポーツと比較して実施率は低い。

また、近年のスポーツ庁健康スポーツ課 (2017) が実施した「スポーツ実施状況等に関する世論調査 (平成 29 年 11-12 月調査)」の報告では、18 歳以上の男女における、この 1 年間の運動・スポーツ実施率は、74.1% であり、調査対象者全体の運動実施率 (複数回答) は、1 位「ウォーキング (57.0%)」、次いで「階段昇降 (13.3%)」、「トレーニング (12.9%)」、「体操 (12.4%)」、「ランニング・マラソン・駅伝 (12.1%)」、「自転車・サイクリング (10.9%)」、「エアロビクス・ヨガ (6.3%)」、「ゴルフ・コースでのラウンド (5.9%)」、「水泳 (5.2%)」、「ゴルフ・練習場・シュミレーションゴルフ (5.1%)」、「ボウリング (4.8%)」の順となっており、球技では「テニス・ソフトテニス (3.8%)」、「卓球 (3.2%)」、「バドミントン (3.2%)」であり、チームスポーツとなる野球、サッカー、バレーボールなどはランク外となった。文部科学省 (2013) の調査結果と比較して、調査対象や調査方法が異なるため、単純な比較はできないが、全体的に運動実施率が低下していることが伺われる。

文部科学省 (2013) の調査結果から、18 歳以上の男女は、個人や少人数で取り組める運動やターゲット型の運動に取り組むことが多いと言える。一方で、学校現場の体育授業で行われるチームスポーツは、ランクインしていないことから実施率が低く、種々の要因から気軽に取り組むことは難しいと判断できる。従って、このような状況から、小・中・高の通常学校における体育授業は高等学校卒業以降の運動習慣形成に与える影響は少ないと推測できる。

そこで、我々は 18 歳以上の男女の実施率が非常

に高い「ウォーキング」「ランニング」などに着目し、高橋・清野 (2016) にて、知的障害者特別支援学校での体育授業「走・跳の運動遊び」の体育授業実践から、通常学校での体育授業において、児童・生徒が楽しく、自主的に持久力向上にむけた取り組みが行えるような授業展開の提案を行った。同様に、20 歳以上の男女の実施率が比較的高いターゲット型のスポーツに着目し、高橋・清野 (2018) では、ターゲット型ゲームである「的あて遊び」を知的障害特別支援学校で実施し、通常学校におけるターゲット型ゲームの導入について提案を行った。

スポーツ庁健康スポーツ課 (2017) の調査結果から、「ゴルフ・コースでのラウンド (5.9%)」、「ゴルフ・練習場・シュミレーションゴルフ (5.1%)」の「ゴルフ」に関する実施率は、「ウォーキング (57.0%)」、「トレーニング (12.9%)」、「体操 (12.4%)」よりも低いものの、球技の中では実施率の最も高い種目となる。従って、高等学校卒業以降の運動習慣形成に最も適している『球技』に限定した場合、それは「ゴルフ」であると言える。

高橋・清野 (2018) で報告した「的あて遊び」は、ボールなどを手で転がしたり、投げたりしていたが、道具を使用してボールを転がしたり、打ったりする運動は実施されなかった。運動の難易度を段階的に設定した場合、打球道具を使用しないターゲット型ゲーム「的あて遊び」から打球道具を使用するターゲット型ゲーム「ゴルフ」へと発展することが合理的であり、ターゲット型ゲームを学ぶ児童・生徒にとっても学びやすい構成になると考えられる。

そこで、本研究では知的障害者特別支援学校に通う生徒を対象とし、ターゲット型ゲーム (ゴルフ) の体育授業実践を通じて、通常学校における体育授業において、個々の能力・興味・関心に応じて取り組めるターゲット型ゲーム (ゴルフ) の導入についての提案を行う。現在の小学校、中学校、高等学校 (スポーツ科を除く) の学習指導要領では、ゴルフの単元が設定されていないため、体育授業の中でゴルフを展開することは現実的に非常に難しい状況となっている。今回の報告により、小・中・高の学習指導要領の「球技」の中に「ゴルフ」も含めたターゲット型が新たに設置されることを期待したい。

2 方 法

2.1 対象

対象は、A校高等部1～3学年の22名とした。授業は男女共習で展開した。対象者は障害や発達の比較的重いグループで、知的障害を伴う自閉スペクトラム症やダウン症、肢体不自由等の生徒である。本研究では、単元計画並びに授業における生徒の活動の様子を随時記述、撮影し、授業者による観察や省察により質的分析を行った。

2.2 指導スタッフ

指導スタッフは、主担当の教師（以下MTと記す）1名と副担当（以下STと記す）9名の合計10名体制とした。

2.3 実施時期

20XX年7月に計6回の授業を実施した。

2.4 使用用具

ゴルフ授業実施に伴い、日本ジュニア育成協議会（JGC）より、スナッグゴルフセット（図1）をレンタルした。クラブは主にスナッグゴルフの道具を使用し、生徒の好みや運動能力に応じてソフトゴルフのクラブ（図2）や「紐を引くことによりクラブが回転し打球することができる手作りの装置（図3）」を使用した。



図1 スナッグゴルフセット（ランチャー、ローラー、ボール、ランチパッド、スナッグフラッグ）

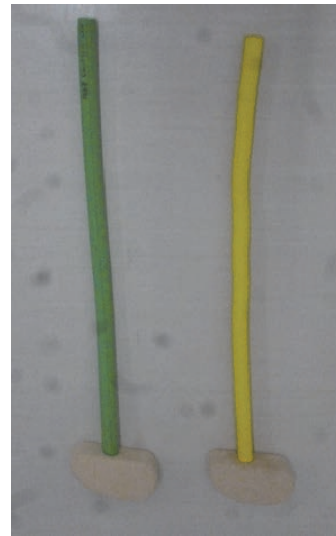


図2 ソフトゴルフのクラブ

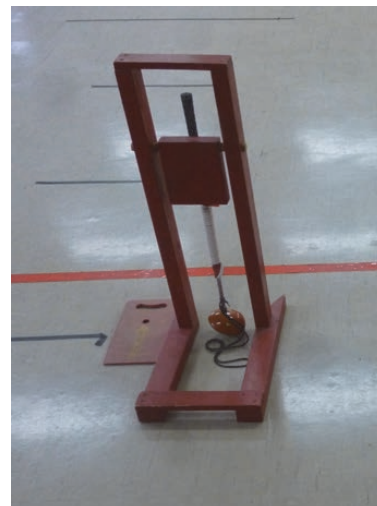


図3 紐で操作する手作りクラブ装置

ボールは直径5cmのスナッグゴルフのボール（図4）以外に直径13cmのアクティブサウンドボール（図5）や直径10cmの穴あきボール（図6）、直径5cm程のボールプールで使用するプラスチックボール（図7）等の複数のボールを使用した。



図4 スナッグゴルフのボール (直径5 cm)
対象生徒に二番人気



図5 アクティブサウンドボール (直径13 cm)
対象生徒に馴染みのボール、一番人気のボール

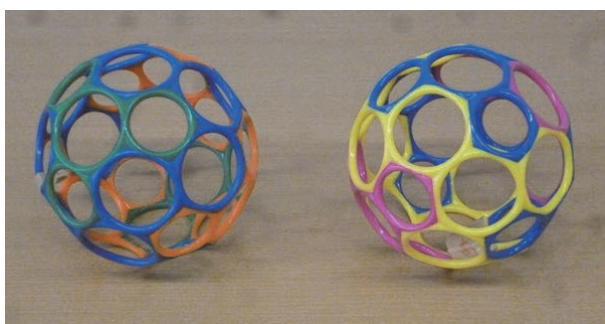


図6 穴あきボール (直径10 cm)

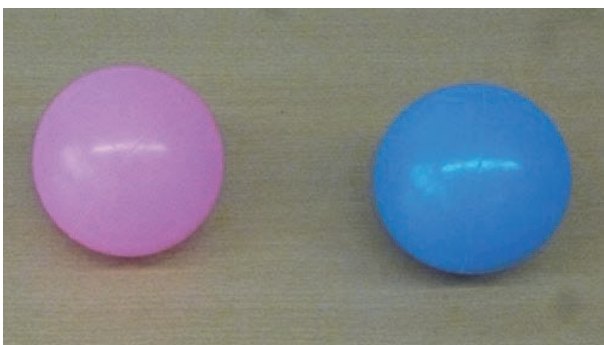


図7 プラスティックボール (直径5 cm程)

授業の中で、ねらい①「クラブを握って自分なりの打ち方での向ってボールを打って楽しもう」、ねらい②「友達や先生方と一緒にゲームの勝敗を楽しもう！」に分けて実施した。

ねらい①では、①-1として自由にクラブやボールを選ばせ、自由にボール打つことで、ボールを打つ楽しさを生徒自身のペースで享受できるように場を設定した。また生徒が思うようにボールを打つことができるようになった時点で、①-2として、的に向かってボールを打つことを目標として実施する場を設定した。

ねらい②では、②-1として、体育館のステージをゴルフ場のティーグラウンドに見立て、ステージからボールを遠くに飛ばす場を設定した。また、②-2として、大きな的を置き、誰が最初に的にボールを当てることができるかを競わせる場を設定した。さらに②-3として、スナッグゴルフの的を使用して、生徒同士が「的に近づく」、もしくは「的に入る」ことを目標に競争できる場を設定した。



図8 授業の場の工夫

クラブやボールを自由に選ぶことができ、生徒の興味関心に応じて取り組める

2.5 授業内容

授業実施については、北 (2015a)、大学ゴルフ授業研究会 (2016)、大石 (2017) の資料を参考にし、的を目立たせたり、的を大きくしたり、自由にボールやクラブを選択して使用できるようにして、知的障害特別支援学校の生徒に適した内容に工夫し実施した (図8, 9)。

2.5 単元のねらい

今回のゴルフ授業における単元のねらいを「先生や友達と一緒にゴルフを楽しもう」とし、全6回の



図 9 目立つように工夫した的



3 結 果

3.1 授業風景

ねらい①「クラブを握って自分なりの打ち方での向かってボールを打って楽しもう」の段階の授業風景を図10に、ねらい②「友達や先生方と一緒にゲームの勝敗を楽しもう！」の段階の授業風景を図11に示す。授業風景からは、生徒の自主的な活動(休憩・ゴルフへの取り組み)が見受けられる。ゴルフは個人のペースで取り組めるため、ゴルフに対して誰一人嫌悪感を抱くことなく、ポジティブな感情をもって活動に取り組んでいる様子が伺われる。

3.2 授業者による観察

授業を進めることにより以下のような生徒の活動が確認された。

- 教師が生徒の側で手本を示し、生徒の後ろから一緒にクラブを握り打ち方の動作を学習させることで、生徒なりのスイングでボールを打つようになった。
- 何回も的に向いボールを打つことで徐々に生徒個々のペースで取り組めるようになった。また、生徒の打ったボールが的に近づく笑顔や喜び、嬉しさ時にはガッツポーズや手を挙げる等の表情を確認することができた。
- 友達の打ったボールが自分の的に近くにあると分かると、生徒同士が自発的に競い合いをする様子を確認することができた。
- 的を目立たせ、なじみやすい場で他の単元の体育授業で使用しているボールを含めた様々なボールを使用することにより「早くボールを打ちたい！」という意欲の現れを確認することができた。

以上の生徒の行動から、生徒に独自のスイングを身につけさせることで、自ら積極的にボールを打つ行動を起こさせ、生徒によっては、他の生徒と競争する場面が確認できた。

4 考 察

特別支援学校において、場づくりの工夫や学習過程を段階的に設定することにより、クラブを使ってボールを打つというゴルフの活動を十分に学習できる可能性が示された。身近な地域には、パークゴルフ、グラウンドゴルフ、ゲートボール等の活動が行

える場が多々あることから、学校体育としてゴルフに触れられることで、卒業後も、ゴルフおよびゴルフ類似のターゲット型スポーツを生涯スポーツとして末永く実践できる可能性が見いだされた。

通常学校においてもゴルフ授業を実施することは、用具の問題が解決されることで、容易に実施可能であると考えられる。大学教育ではゴルフは体育授業の中でもメジャーな開講科目ともなっており、履修生も非常に多いのが現状である(北, 2015b)。従って、小・中・高の通常学校においてもターゲット型ゲームとしてのゴルフを設定することで段階的に学ぶことができ、社会人となってもゴルフに親しむ習慣形成につながると思われる。

授業風景から、数名の生徒が順番待ちや休憩のため、マットや床に座って休む場面が確認されている。また、ゴルフ自体の運動強度が低いため、必要な運動強度・運動量が確保されているとは言い難い。今後は、ゴルフ授業の中にリズム体操を取り入れたり、18歳以上の男女の実施率の高い「ウォーキング」「ランニング」を組み合わせた「ゴルフバイアスロン(仮称)」⁽¹⁾として、タイムとスコア両方に着目できる新種目を導入することを検討している。

文部科学統計要覧(平成27年版)によれば、大学生の数は2011年の約289万人をピークとして少しずつではあるが減少している。一方で独立行政法人日本学生支援機構(2017)の調査では、全国で「精神障害」は6775人「発達障害」は4150人の学生が大学に在籍しており、年々増加傾向にある。このように、学生数は減少している状況にありながら、障害を持った学生が増加していることから、大学も含めた大学以下の教育機関においても、障害をもった児童・生徒・学生に対応できる体育授業の内容について整備する必要があると考えられる。このような状況において、体育授業の単元として適しているのは、個人のペースで取り組むことができ、かつ競争も可能となるゴルフを含めたターゲット型のゲームであると認識できる。以上のことから、ターゲット型ゲームを通常学校の体育授業についても導入を提案したい。

5 付 記

本稿は、2019年11月15日(金)～17日(日)の期間に筑波大学にて開催された日本スポーツ心理学会第46回大会において、一般研究発表(ポスタ

一発表）の部で発表した内容を編集・加筆し、まとめたものである。

謝 辞

本研究における授業実践は、日本ジュニア育成協議会（JGC）よりスナッグゴルフの用具を無償レンタルさせていただき実施しました。ゴルフ授業の実践が実現できたのも、ご協力いただいた JGC の槇岡 充浩様および、仲介頂いた日本ゴルフ場経営者協会専務理事の大石順一様のご尽力によるものです。ここに感謝の意を表します。

注

- (1) すでに「スピードゴルフ」というスコアとプレイ時間を競う競技がある（参考 URL：<https://www.speedgolffapan.com/about>）。

引用・参考文献

- ・文部科学省(2013)「体力・スポーツに関する世論調査（平成 25 年 1 月調査）」．文部科学省ホームページ．
URL:http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/icsFiles/afieldfile/2013/08/23/1338732_1.pdf. p15.
(閲覧日：2019 年 12 月 15 日)
- ・スポーツ庁健康スポーツ課（2017）「スポーツの実施状況等に関する世論調査」 URL：https://www.mext.go.jp/pre v_sports/comp/b_menu/other/icsFiles/afieldfile/2018/03/30/142346_77_1.pdf. p11. (閲覧日：2019 年 12 月 15 日)
- ・高橋憲司, 清野宏樹（2016）「小・中学校体育授業における児童・生徒の全身持久力向上に向けた提案—知的障害特別支援学校での体育授業実践から—」愛知学泉大学 研究所紀要『地域社会デザイン研究』5, pp1-5. URL:https://gakusen.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=925&file_id=18&file_no=1
- ・高橋憲司, 清野宏樹（2018）「学校体育授業におけるターゲット型ゲーム導入の提案：知的障害特別支援学校での体育授業実践から（2）」現代マネジメント学部紀要,6 (2),9-15. URL:https://gakusen.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=970&file_id=18&file_no=1
- ・大学ゴルフ授業研究会（編）（2016）「ゴルフの授業実践—体育授業としてのゴルフ—」三恵社.
- ・北徹朗（2015a）「ターゲット型ゲームの技術・戦術学習」武蔵野美術大学身体運動文化研究室（編）『スポーツ・健康と現代社会』武蔵野美術大学出版局, pp.218-222.
- ・大石順一（2017）「ゴルフ場業界は『スポーツの成長産業化』に貢献できるか」日本運動・スポーツ科学学会第 24 回大会プログラム・抄録集,p.8.
- ・北徹朗（2015b）『『ゴルフ教育研究』の創刊にあたり』ゴルフ教育研究 第 1 巻（1）,p1.

（原稿受理年月日：2020 年 1 月 14 日）